

スポーツ大学における競技スポーツの検証 ：陸上競技部16年間の活動を振り返って

渋谷 俊浩¹⁾

A Report on Athletic Sports at Biwako Seikei Sport College ： The 16 year History of the Track & Field Club

Toshihiro SHIBUTANI

Abstract

In 2003, the Track & Field Club (T&F Club) was established as a “Flagship Club” , and as a practical case of “Athletic Sport” in Biwako Seikei Sport College (BSSC).

Now in 2018 (16 years), the T&F Club has developed to include more than 150 members, and has a competitive level in the top league of the Kansai Intercollegiate Track & Field Championship.

Now, has “Athletic Sport” progressed so far and practiced from the viewpoint of “Improve Competitiveness” by BSSC?

This report, aims to verify the current status of “Athletic Sport” in BSSC, throughout the 16 years history (trends in competitive performance = competition results) of the T&F Club, and towards the 2020 Tokyo Olympic Games and 2024 National Sports Festival in SHIGA.

We present strategy, our own BSSC style is necessary and should be further constructed, in order to promote the development of the T&F Club.

I expect that this report will provide fundamental data for considering the position of “Athletic Sport” and measures to improve competitiveness in BSSC.

Key words : athletic sport, improve competitiveness, BSSC Track & Field Club, Kansai Intercollegiate Track & Field Championship

キーワード：競技スポーツ，競技力向上，びわこ成蹊スポーツ大学 陸上競技部，
関西学生陸上競技対校選手権大会

1) スポーツ学部

1. はじめに

2003年4月、大学名に「スポーツ」を冠する国内初の大学として「びわこ成蹊スポーツ大学」が開学すると同時に、陸上競技部（当時は女子中長距離主体のチームとして）とサッカー部も創部した。もちろん、スポーツ大学として、この2つのクラブ以外にも当時の専任教員の専門種目を中心に、バスケットボール部・バレーボール部・水泳部・テニス部などの14のスポーツクラブが産声を上げたのだが、陸上競技部とサッカー部については学生募集（定員確保）の観点・期待からも、特に「大学として力を入れるクラブ」すなわちフラッグシップとなるクラブとして位置付けられた。

ここで注意すべき点は、上述下線部の「力を入れる」という言葉に表されるように、当時体育系大学や競技スポーツで名を馳せている伝統・強豪大学では、すでに一般的であった「強化」という言葉を外向けには使わなかったことである。競技スポーツの現場で使われる「強化」という言葉には、そのためには大学（経営側）が「ひと・もの・かね」を投入して「競技力向上」を図るという意味が含まれているといっても過言ではない。しかしながら、当時の本学は資源（施設、資金等）やシステム構築が十分ではなく、高校生・保護者・指導者に対して、あえて「力を入れる」程度の言葉しか使えなかったことが要因として挙げられる。

このように、本学における「競技スポーツ」の始まりと位置づけは非常に曖昧なものであったが、この「びわこスタイルの強化？」はその後10年にわたって続いた。その後、2013年になって明確に「スポーツを強化する」「競技力向上を目指す」ことが「学園・大学の方針」として掲げられ、ようやく本格的な強化が始まったのではないかと考える。

そして、開学・創部から16年経った2018年、2020年に東京オリンピック・パラリンピ

ックを、さらには2024年に2巡目滋賀スポーツ大会（国体）を控えるにあたり、本学の中核クラブである陸上競技部の歴史を振り返りながら、その競技力の推移について今一度検証することとした。本報告が、スポーツ大学の本質にかかわる重要な課題であろう「競技スポーツの位置づけ」について、また本学に適した・本学ならではの「強化・競技力向上方策」を検討するための有用な基礎的資料となれば幸いである。

2. 陸上競技部の歴史と競技成績の推移

表1に、陸上競技部小史（2002—2018）を示した。

2-1. 創成期（2002—2005）

前述したように、本学陸上競技部（以下、陸上部）は女子長距離・駅伝を主体として創部した。開学1年前（2002年）の準備段階では、地元滋賀県および著者の出身地である兵庫県などの関西圏の女子中長距離選手を対象に、府県インターハイ・近畿インターハイ・府県駅伝等で勧誘を行った。その結果、2003年4月の創部は当時のAO入試に合格した5名の女子中長距離選手を含む、短距離・跳躍・投てきなどの男女34名の1年生と、長距離が専門であるコーチ兼監督1名（著者）により組織された。活動の拠点となる施設として3種公認のオールウェザートラック（6レーン、外周走路、ナイター照明装備）を擁し、学内の他のクラブに先駆けて「陸上競技部規約」を制定・全部員に周知するなどして部の統制を図ったが、学生主体の運営や（女子中長距離以外の種目の）トレーニング等については、既存の他大学と比較すると非常に未熟な体制であった。

トラック&フィールドの大会については、創部1年目から学生の主要大会である関西学生陸上競技対校選手権大会（以下、関西インカレ）、全日本学生チャンピオンシップ（現全

表1. 陸上競技部 小史 (2002-2018)

年	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	
大学動向	開学準備	開学・2学科6コース			1期生卒業	定員増・2学科7コース				
陸上界動向	プサンアジア大会	エドモントン世界CH 大邱ユニバ	アテネ五輪	パリ世界CH イズミルユニバ	ドーハアジア大会	大阪世界CH バンコクユニバ	北京五輪	ベルリン世界CH ペオグラードユニバ	広州アジア大会	
陸上部動向	創部準備・勧誘開始	創部：34名 関西インカレ2部 日本インカレ出場 チャンピオンシップ出場	41名 2部 日本インカレ出場	71名 2部 日本インカレ入賞 (女子PV：5位)	64名 2部 日本インカレ入賞 (女子10kmW：5位、 女子PV：7位)	5th：67名 2部 日本インカレ出場 日本学生競歩CH入賞 (女子20km：7位) チャンピオンシップ出場	93名 2部 日本インカレ入賞 (女10000mW：2・5位、 男PV：7位、女PV：8位) チャンピオンシップ優勝 (女10000mW：1位) 国体入賞 (女10000mW：3・7位)	94名 2部 日本インカレ出場 チャンピオンシップ出場	106名 2部2位 (1部昇格) 日本インカレ出場	
主要大会成績他			関西女子駅伝出場	関西女子駅伝出場 関西大学駅伝出場	関西女子駅伝出場 関西大学駅伝出場	関西女子駅伝出場 関西大学駅伝出場	関西女子駅伝出場 関西大学駅伝出場 関西大学駅伝出場 全国大学パフォーマンス ランキング5位	関西女子駅伝出場 関西大学駅伝出場	関西女子駅伝出場 関西大学駅伝出場	
年	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020
大学動向	定員増			定員増	1学科7コース			定員増		
陸上界動向	大邱世界CH 深圳ユニバ	ロンドン五輪	モスクワ世界CH カザンユニバ	仁川アジア大会	北京世界CH 光州ユニバ	リオ五輪	ロンドン世界CH 台北ユニバ	ジャカルタアジア大会	ユージンWCH ナポリユニバ	東京五輪
陸上部動向	120名 1部12位 (2部降格) 日本インカレ入賞 (10000mW：7位) チャンピオンシップ出場	10th：116名 2部2位 (1部昇格) 日本インカレ入賞 (10000mW：6位) 個人選手権入賞 (10000mW：6位) 日本学生競歩CH入賞 (20km：2・3位)	125名 (M105：F20) 1部6位 日本インカレ入賞 (10000mW：6位) 個人選手権出場	122名 (M100：F22) 1部10位 日本インカレ出場 個人選手権出場 日本ジュニア入賞 (十種：3位)	125名 (M103：F22) 1部10位 日本インカレ入賞 (10000mW：6位) 個人選手権入賞 (10000mW：7位)	126名 (M106：F20) 1部12位 (2部降格) 日本インカレ入賞 (10000mW：5位) 個人選手権出場 国体入賞 (10000mW：8位)	15th,131名 (114：17) 2部2位 (1部昇格) 日本インカレ入賞 (10000mW：8位) 個人選手権出場 日本学生競歩CH入賞 (20km：4位)	155名 (M134：F21) 1部8位 日本インカレ出場 個人選手権出場	1部 ⇒ ⇒	- -
主要大会成績他	関西女子駅伝出場 関西大学駅伝出場	関西女子駅伝出場 関西大学駅伝出場	関西女子駅伝出場 関西大学駅伝出場	関西女子駅伝出場 関西大学駅伝出場	関西女子駅伝出場 関西大学駅伝出場	個人選手権出場 OB丸尾アジア大会入賞 (50kmW：4位、団体系)	OB丸尾世界CH入賞 (50kmW：4位、団体系)	OB丸尾アジア大会入賞 (50kmW：4位)		

日本大学個人選手権), 日本学生陸上競技対校選手権大会(以下, 日本インカレ), 関西学年初別選手権(現関西種目別選手権)に出場した。そして, 2005年の日本インカレにおいて, 堀さやか(3年)が女子棒高跳びで全国大会初入賞(5位)を果たした。

駅伝・ロード大会については, 創部2年目の2004年に関西大学女子駅伝対校選手権大会(以下, 女子駅伝)に初出場し, 女子に遅れること1年の2005年には男子が予選を突破し, 関西大学駅伝対校選手権大会(以下, 男子駅伝)に初出場を果たした。

2-2. 発展期(2006—2012)

全学年が揃い, 創部メンバーの卒業年であった2006年以降, 2010年には部員数が100名を超えるなど, 陸上部は目覚ましい発展を遂げた。

その中でも, 特筆すべき活躍が2つある。まず一つ目は, 2008年の全日本学生チャンピオンシップにおいて, 沢田美紀(4年)が女子10000m競歩で陸上部初の全国大会優勝を果たしたことである。この快挙は本学にとっても初の全国優勝であったとともに, 学生陸上界に「びわスポ」の名を知らしめ, その後の選手勧誘(特に競歩・長距離)を促進する重要なきっかけとなった。以来, 競歩陣は国民体育大会(以下, 国体)および全日本学生競歩選手権(以下, 学生競歩)等においても上位入賞の常連となり, 「びわスポ=競歩」のポジションを確固たるものにしたと考える。

二つ目は, 2010年の関西インカレにおいて2部総合2位となり, 創部8年目にして初の1部昇格を果たしたことである。この躍進の要因は, 部員諸君の頑張りはもちろんのこと, コーチングスタッフの充実が挙げられる。それまでは男女中長距離以外にはコーチがおらず, トレーニングをはじめ, ほとんどの面で「学生主体」であったが, 2006年に専任教員(10種競技専門)が監督に就任し, その後投てきコーチ(職員), 女性コーチ(助

手・中距離専門)を迎えたことで, ほぼ全種目のコーチングおよび日常生活を含めての指導が可能となり, チームの競技力が劇的に向上した。残念ながら, 翌2011年には1部最下位で再び2部に降格したが, 翌2012年(創部10年目)には2部総合2位で1部再昇格を果たした。

学生の国内最高峰の大会である日本インカレについては, 2006・2008年に複数入賞(男女棒高跳, 男女10000m競歩), 2011・2012年にも入賞を果たした。

競技成績以外では, 2009年に「全国大学陸上競技パフォーマンスランキング」(陸上競技マガジン3月号: ベースボールマガジン社)において, 並み居る全国の伝統・強豪大学(210校)の中で56位にランキングされた。加えて同年, 現在では陸上部の主催事業となった「びわスポ記録会」が, コーチングコースの著者ゼミ活動の一環として第1回大会を開催するに至った。

2-3. 充実期(2013—2017・2018)

部員数が安定的に120名を超え, 学内でもサッカー部(200名超)・硬式野球部(150名程度)に次ぐ規模となった。2016年にはコーチングスタッフの入れ替わりがあり, 新たに監督(専任教員, 跳躍専門)・総監督(職員, 短距離・投てき)を迎えた。2017年には学内で「ビッグ3」のクラブとして位置づけられ, 2018年には部員数が150名を超えた。

全国大会への連続出場記録を更新し続ける中, 日本インカレ・日本ジュニア・国体・学生競歩において, ほぼ毎年のように入賞を果たした。

関西インカレにおいては, 1部に再昇格した2013年に総合6位(12校中)となり, 他大学, 特に関関同立・産近甲龍と呼ばれる関西の伝統・強豪校には大きなインパクトを与えることができた。その後も2016年までの4年間は1部を維持し, 2017年の2部降格後も2018年には1部に復帰(総合8位, 2019年は

1部確定)するなど、名実ともに関西陸上強豪校の仲間入りを果たした。

また、OBの活躍も顕著で、8期生の丸尾知司が2017年ロンドン世界選手権・2018年ジャカルタアジア大会の男子50km競歩において、ともに4位に入賞(世界選手権では団体金メダルを獲得)し、国内のみならず国際的にも「びわスポ陸上部」「びわスポ競歩」の知名度向上に貢献した。

3. 競技力の検証

陸上競技において、「記録」と「順位」は競技力を構成する重要な要素である。本稿では「順位」を「対校得点」に置き換え、特に男子の関西インカレにおける「記録」と「対校得点」の推移から、本学陸上部の競技力について検証した。

なお、本学陸上部は日本学生陸上競技連合(以下、日本学連)が統括する7連盟(北海

道、東北、関東、北信越、東海、関西、中四国、九州)の一つである関西学生陸上競技連盟(以下、関西学連)に所属しており、同連盟は歴史・登録学生競技者数及び競技パフォーマンスについても関東に次ぐ2番目の競技力を有している。

3-1. 記録からの検証

表2に種目別の最高記録(日本記録、日本学生記録、関西学生記録、びわスポ記録)を、表3に直近5年間(2014~2018年)の関西インカレ1部における種目別順位と対応する記録を示した。

表2から、全体的な傾向として、関西学生のレベルは日本学生と比較して低いことがわかる。その中でも、特に男子投てき種目が低い。また、びわスポ記録は関西学生をさらに下回っている。

このような状況の背景には、陸上競技界の

表2. 種目別最高記録の比較 (2019.01.11.現在)

〔男子〕					〔女子〕				
種目	日本記録	日本学生	関西学生	BSSC	種目	日本記録	日本学生	関西学生	BSSC
100m	9秒98	9秒98	10秒07	10秒46	100m	11秒21	11秒32	11秒57	12秒5
200m	20秒03	20秒21	20秒67	21秒19	200m	22秒88	23秒15	23秒66	26秒17
400m	44秒78	45秒03	45秒44	47秒06	400m	51秒75	51秒80	52秒85	60秒44
800m	1分45秒75	1分45秒75	1分47秒61	1分51秒70	800m	2分00秒45	2分00秒92	2分02秒71	2分13秒61
1500m	3分37秒42	3分35秒69	3分41秒39	3分53秒21	1500m	4分07秒86	4分13秒14	4分15秒25	4分34秒20
5000m	13分08秒40	13分19秒00	13分20秒43	14分24秒08	5000m	14分53秒22	15分13秒09	15分17秒53	16分42秒63
10000m	27分29秒69	27分27秒64	28分33秒4	29分33秒66	10000m	30分48秒89	31分30秒92	31分30秒92	36分21秒00
110mH	13秒36	13秒50	13秒66	14秒23	110mH	13秒00	13秒15	13秒27	14秒17
400mH	47秒89	47秒89	49秒41	51秒06	400mH	55秒34	55秒94	56秒75	62秒79
3000mSC	8分18秒93	8分25秒80	8分36秒55	9分30秒53	3000mSC	9分33秒93	9分44秒22	10分00秒65	11分37秒42
10000mW	37分58秒08	38分16分76	39分24分49	40分31秒31	10000mW	43分01秒60	44分34秒13	44分52秒90	46分37秒04
4×100R	37秒60	38秒54	39秒11	40秒50	4×100R	43秒39	44秒59	44秒82	48秒96
4×400R	3分00秒76	3分03秒71	3分05秒45	3分13秒05	4×400R	3分28秒91	3分34秒70	3分36秒67	4分12秒08
走高跳	2m33	2m32	2m25	2m08	走高跳	1m96	1m95	1m84	1m69
棒高跳	5m83	5m75	5m56	5m20	棒高跳	4m40	4m23	4m22	3m90
走幅跳	8m25	8m25	8m13	7m46	走幅跳	6m86	6m78	6m27	5m52
三段跳	17m15	16m98	16m27	16m07	三段跳	14m04	13m69	13m05	12m40
砲丸投	18m85	18m64	17m41	13m37	砲丸投	18m22	17m39	15m27	12m79
円盤投	62m16	59m21	51m13	46m19	円盤投	58m62	54m90	53m08	40m58
ハンマー投	84m86	75m82	66m48	56m31	ハンマー投	67m77	64m43	59m04	42m11
やり投	87m60	84m28	78m77	63m50	やり投	63m80	62m37	59m22	50m81
10種競技	8308点	7930点	7642点	7012点	7種競技	5962点	5907点	5486点	3161点
ハーフマラソン	1時間00分17秒	59分48秒	1時間02分25秒	1時間07分11秒	ハーフマラソン	1時間08分11秒	1時間09分29秒	1時間10分40秒	1時間28分16秒

* 太字は留学生記録

経年的傾向である「高校生アスリートの関東進学志向」がある。特に男子長距離選手の「箱根駅伝志向」を筆頭に、インターハイ・国体等で活躍（優勝・入賞等）した、また各種目のランキング上位の高校生は、その多くが首都圏・関東の大学に進学することから、必然的に関西の大学に進学する（留まる）高校生アスリートの競技レベルは低くなる。加えて、本学陸上部においては、そのレベルの高校生を今度は関西の伝統・強豪大学と競合して勧誘することになるため、これまでの本学陸上部の選手獲得状況は、一部の種目（男子競歩＝国体優勝・インターハイ入賞レベル、女子やり投げ＝国体優勝、跳躍＝全国インターハイ・国体出場レベル）を除き、近畿インターハイ出場レベルが中心となっている。そのような選手層を有する本学陸上部の現状は、男子競歩と男子三段跳びにおいて学生の全国大会（日本インカレ、国体、学生選手権等）入賞レベルにあり、また表3から関西インカレ1部においては男子10種目（100m・200m・400mH・10000mW・走高跳・棒高跳・走幅跳・三段跳・円盤投・10種競技）、女子3種目（走幅跳・三段跳・やり投）が入賞レベルにあることがわかる。

また、専門雑誌（陸上競技マガジン2018年6月号）の特集「四年間で最も伸びた大学生を探せ！2017」の中で、「2017年度卒業生の中で、高校時代から大学時代で最も自己ベストを伸ばした（ランキング順位を上げた）選手」として、吉田拓也（男子200m）・細谷海人（男子円盤投）・菅浪裕也（男子10000mW）が紹介されるなど、全国レベルでも高い評価を得ている。

3-2. 関西インカレにおける対校得点からの検証（男子）

図1に関西インカレにおいて本学陸上部が獲得した対校得点の推移について、表4-1. にその内訳を、表4-2. に本学陸上部が1部時（2011, 2013-2016, 2018, 計6年）に獲

表3. 関西インカレ1部における種目別順位と記録（2014-2018：平均）

	100m	200m	400m	110mH	400mH	4×100R	4×400R	800m	1500m	5000m	10000m	3000mSC	10000mW	ハーフトラン
1位	10秒38	21秒23	46秒92	13秒76	50秒74	39秒66	3分08秒47	1分51秒39	3分58秒43	14分31秒32	29分55秒13	8分57秒13	40分37秒92	1.05分02秒
2位	10秒59	21秒38	47秒14	14秒05	50秒96	39秒86	3分08秒89	1分51秒57	3分59秒18	14分32秒84	30分05秒45	9分01秒19	42分24秒51	1.05分41秒
3位	10秒62	21秒43	47秒36	14秒08	51秒13	40秒08	3分09秒48	1分51秒78	3分59秒90	14分34秒99	30分21秒59	9分03秒62	42分59秒89	1.05分58秒
4位	10秒64	21秒51	47秒74	14秒18	51秒29	40秒21	3分10秒29	1分52秒47	4分00秒30	14分37秒19	30分26秒70	9分08秒81	43分31秒72	1.06分33秒
5位	10秒66	21秒53	47秒58	14秒24	51秒61	40秒35	3分10秒64	1分53秒27	4分01秒42	14分38秒07	30分36秒10	9分13秒02	43分51秒79	1.06分50秒
6位	10秒68	21秒61	47秒76	14秒31	51秒91	40秒40	3分11秒60	1分53秒85	4分01秒59	14分40秒80	30分41秒37	9分17秒25	44分43秒07	1.07分14秒
7位	10秒71	21秒77	47秒96	14秒41	52秒71	40秒71	3分12秒14	1分55秒55	4分02秒03	14分43秒40	30分49秒36	9分19秒56	45分30秒31	1.07分30秒
8位	10秒74	21秒84	48秒75	14秒67	53秒84	41秒11	3分13秒21	1分56秒96	4分02秒28	14分45秒25	30分55秒99	9分20秒46	45分56秒37	1.07分45秒
準決勝	10秒75	21秒84	-	14秒61	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
予選	10秒73	21秒81	48秒18	14秒47	51秒60	40秒73	3分13秒19	1分52秒82	3分58秒31	-	-	-	-	-

	走高跳	棒高跳	走幅跳	三段跳	砲丸投	円盤投	ハンマー投	やり投	10種競技
1位	2m11	5m18	7m69	15m70	15m17	48m54	62m73	72m92	7194点
2位	2m07	5m08	7m61	15m52	14m85	45m54	60m08	71m05	6866点
3位	2m07	4m98	7m49	15m36	14m53	43m97	59m15	69m30	6797点
4位	2m05	4m85	7m42	15m21	14m35	43m62	58m08	66m99	6591点
5位	2m02	4m80	7m39	15m13	14m17	42m89	57m45	65m52	6536点
6位	2m00	4m65	7m33	15m03	14m07	42m60	57m13	63m93	6446点
7位	1m98	4m63	7m27	14m99	13m86	42m09	56m45	63m25	6404点
8位	1m97	4m63	7m25	14m88	13m57	41m32	55m05	62m48	6332点

表4-1. 対校得点内訳

種目(数)	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	総対校得点	年対校得点
短距離(3)						1	11	16		18	7	1	2	10	12		78	4.9
ハードル(2)		5	5	7		14	21	22		10	4	4					92	5.8
中長距離(5)		19		18	13	9	24	13		23	10	5					134	8.4
トラック							4	17	18	27	16	12	15	3	20	8	140	8.8
競歩(1)																	60	3.8
リレー(2)			3	3	2	2	6	13		15	2	2	1		11		504	31.5
計(13)		24	8	28	15	26	66	81	18	93	39	24	18	13	43	8	165.5	10.3
跳躍(4)			12	2	8	8	3	13		23.5	6.5	14	12	5.5	39	19	165	10.3
フィールド			5	5	11	17	25	26	6	28			2	1	37	2	330.5	20.7
投てき(4)			17	7	19	25	28	39	6	51.5	6.5	14	14	6.5	76	21	61	3.8
計(8)							3	16		11	6		1	6	16	2	0	0.0
混成(1)																		
ロード・ハーフマラソン(1)																		
総得点(23)	0	24	25	35	34	51	97	136	24	155.5	51.5	38	33	25.5	135	31	895.5	56.0
カテゴリー	2部	2部	2部	2部	2部	2部	2部	2部*	1部*	2部*	1部*	1部	1部	1部*	2部*	1部		(点)
* 2部上位2校(総合1位・2位)は次年度1部昇格, 1部下位2校(総合11位・12位)は次年度2部へ降格																		

表4-2. 1部対校得点内訳

種目(数)	2011	2013	2014	2015	2016	2018	2018	総対校得点	年対校得点
短距離(3)		7	1	2	10			20	3.3
ハードル(2)		4	4					8	1.3
中長距離(5)		10	5					15	2.5
トラック		18	16	12	15	3	8	72	12.0
競歩(1)								5	0.8
リレー(2)		2	2	1				120	20.0
計(13)	18	39	24	18	13	8		57	9.5
跳躍(4)		6.5	14	12	5.5	19		11	1.8
フィールド		6	6.5	14	6.5	21		68	11.3
投てき(4)								15	2.5
計(8)	6	6	14	14	6	2		0	0.0
混成(1)								203	33.8
ロード・ハーフマラソン(1)								平均順位	9.7
総得点(23)	24	51.5	38	33	25.5	31	8		
1部総合順位	12	6	10	10	12	8			

(点)

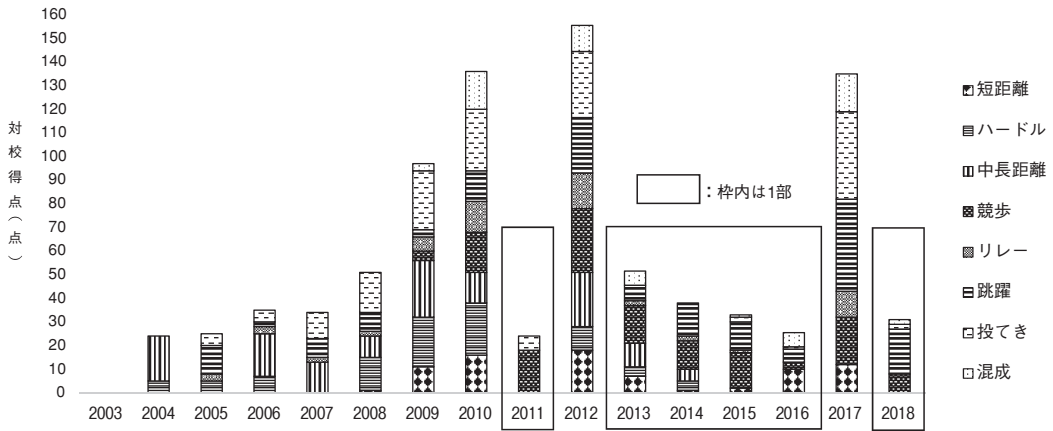


図1. 関西インカレ対校得点の推移

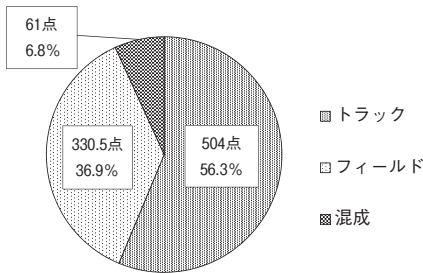


図2. 対校得点内訳 (カテゴリー別)

得した対校得点の内訳を示した。さらに、図2に対校得点のカテゴリー別の内訳を、図3に種目別の内訳を示した。

本学陸上部は、創部当初の2003年から「関西インカレ1部昇格」を目標に関西インカレに出場し、2004年に初めて対校得点を獲得(24点、800m・1500m・400mH)した。その後、部員数の増加(学年が揃うこと)に伴い得点も増え、2008年(51点)にはさらに具体的な戦略をもって1部昇格(2部総合2位以上、130点)を目指した。(図1、表4-1)

その戦略とは、各種目の選手層を厚くすることはもちろん、他大学の戦力を分析し、2部において得点を獲得できる可能性の高い種目(ハードル・競歩・投てき・跳躍)を対象に積極的な勧誘で選手を獲得していくものであった。この戦略が功を奏したのは、2008-2009年に勧誘した選手が2・3年生に進級し、チームの主力となった2010年であった。

関西インカレでは、前述した種目を中心に136点を獲得して2部総合2位となり、本学陸上部初の1部昇格を果たすことができた。

初めて1部で戦った2011年は、わずか24点(競歩、投てき)しか獲得できず、1部最下位で2部降格となったが、翌2012年には156点を獲得(ほぼ全種目で入賞)して2部総合2位となり、1部に再昇格した。

再昇格した2013年では、これまでも貢献していた競歩・跳躍に加えて中長距離・短距離が健闘し、51.5点を獲得して総合6位(1部における本学最高順位)となった。この時の1部総合順位(得点)の内訳が、1位:関学大(215点)・2位:大体大(130.5点)・3位:立命大(93点)・4位:関西大(81点)・5位:大教大(53点)、7位:京産大(51点)・8位:龍谷大(44点)・9位:近畿大(42点)・10位:同志社大(41点)であることから、当時の関西学生陸上競技界における本学陸上部の躍進が顕著であったことを示していると考えられる。(表4-2)

その後、2016年までは1部を死守(2014年-10位、2015年-10位)したが、2016年に1部最下位(12位、25.5点)で2部降格し、翌2017年に2部総合2位(135点)で1部昇格、2018年は1部8位(31点)で2019年は1部残留となった。

また、本学陸上部が1部に初昇格した2011

表5-1. 関西インカレ 1部総合得点の推移 (2011-2018)

	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	平均
1位	166.5	164	215	195	187	206.5	235	157	190.8
2位	144	144	130.5	105	110	111	128	156	128.6
3位	97	126	93	96	84	93.5	110.5	93	99.1
4位	95	99	81	82	80	87	99	82	88.1
5位	84	80	53	77	74.5	81.75	62	65	72.2
6位	51	64	51.5	59.5	71	60	58	65	60.0
7位	50.5	46	51	52	66	43	56	43	50.9
8位	48	45	44	50	57	41	46	31	45.3
9位	37	31	42	38.25	43	40.25	40	31	37.8
10位	26	24	41	38	33	39	25.5	30	32.1
11位	24	21	30	35	24.5	28.5	18	28	26.1
12位	24	10	26	23.25	22	25.5	15	21	20.8

■ : BSSC (点)

表5-2. 関西インカレ 1部校の推移 (2011-2018)

	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019
1位	関学大	関学大	関学大	関学大	関学大	関学大	関学大	立命大	関学大
2位	立命大	立命大	大体大	大体大	大体大	立命大	立命大	関学大	立命大
3位	大体大	大体大	立命大	立命大	京産大	同志社大	大体大	大体大	大体大
4位	京産大	関西大	関西大	京産大	大教大	京産大	同志社大	京産大	京産大
5位	関西大	京産大	大教大	京都大	京都大	大体大	近畿大	近畿大	関西大
6位	近畿大	同志社大	BSSC	関西大	立命大	大教大	京都大	同志社大	近畿大
7位	同志社大	龍谷大	京産大	近畿大	関西大	近畿大	京産大	龍谷大	同志社大
8位	天理大	近畿大	龍谷大	大教大	同志社大	京都大	大教大	BSSC	龍谷大
9位	龍谷大	大教大	近畿大	同志社大	近畿大	関西大	天理大	京都大	BSSC
10位	摂南大	天理大	同志社大	BSSC	BSSC	京教大	関西大	関西大	京都大
11位	京教大	摂南大	天理大	龍谷大	天理大	龍谷大	大阪大	大教大	大阪大
12位	BSSC	大阪大	京教大	摂南大	大阪大	BSSC	京教大	天理大	大國大

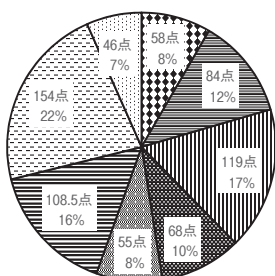


図3-1. 対校得点内訳 (2部)

- 短距離
- ハードル
- ▨ 中長距離
- ▩ 競歩
- ▧ リレー
- ▦ 跳躍
- 投てき
- 混成

年から2018年までの8年間の、1部校とその総合得点・順位の推移(表5-1, 表5-2)を見ると、この期間1部校であった大学は延べ15校で、その内訳は1部安定校:7校(関学大・立命大・大体大・京産大・関西大・近畿大・同志社大)、1部常連校:2校(大教大・京都大)、1部昇格と2部降格を繰り返しているエスカレーター校:6校(天理大・龍谷大・摂南大・京教大・大阪大・びわスポ大)となっており、さらに1部残留のボーダーラインである総合10位以内となるためには、32.1点以上の獲得が必須であることが分かる。

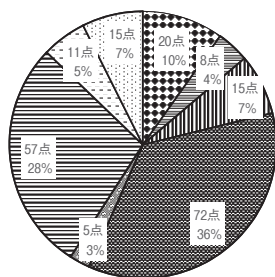


図3-2. 対校得点内訳 (1部)

- 短距離
- ハードル
- ▨ 中長距離
- ▩ 競歩
- ▧ リレー
- ▦ 跳躍
- 投てき
- 混成

以上のことから、本学陸上部の関西インカレにおける競技力は「2部ではほぼ全ての種目において複数入賞(8位以内)できる(図3-1)」「1部では競歩(72点・36%)と跳躍(57点・28%)の複数入賞得点に頼ってい

る(図3-2)「1部での得点平均は33.8点で1部残留のために必要な32.1点をわずかに上回っている(表5-1)」レベルであることが明らかとなった。

4. 今後の課題と展望

創部8年目の2011年、アカデミックアワー「スポーツ学再考：BSSCにおける競技スポーツの現状と課題」において、渋谷(2011b)は本学陸上部の「関西インカレ1部昇格・定着の意義とその方策」「SPDLIサイクルを活用した戦略立案の重要性」「金の卵(有望高校生)獲得の方策」、さらに「今後の課題と展望」等を提示し、大学等の協力をいただきながら、選手・現場スタッフが一丸となって競技力向上に努めてきた。

それから7年後の2018年現在、いくつかの成果が出始めている。競技力向上の前提である部員の確保および指導体制の確立については、陸上部小史でも紹介したように、本学陸上部は2017年からスタッフを充実させることで全種目のコーチングが可能となり、勧誘活動においてもより多くの人脈を獲得することができた。その効果は、これまでは30名前後であった新入部員の数が2017年度は40名(全国優勝・入賞者レベル複数含む)、2018年度は50名を超えたことなどに反映されており、新スタッフ体制の完成年度である2020年には部員数が200名を超えることが推測される。また、競技力についてもチームとしては関西インカレ1部レベル、個人では日本インカレ入賞レベルが定着しつつあり、本学陸上部の強化は着実に進んできているものと考えられる。

その一方で、チームとして臨む関西インカレにおいては、2019年に新規1部校となる大阪国際大をはじめ、伝統・強豪校の強化方策も進んでおり、特に本学陸上部の得点源である競歩(龍谷大・京都大・大阪大等が充実)・跳躍(立命大・大阪国際大等)での競合が、これまで以上に激しくなることが明白である。

したがって、本学陸上競技部が関西インカ

レ1部に定着する(総合得点32.1以上を獲得し続ける)ためには、これまでの本学重点種目の強化に加え、新たな戦略が必要となってくる。引き続き多くの部員を獲得していく(毎年50名程度)ことを前提に、他大学の選手層が薄い一部投てき種目(円盤投、砲丸投)や、決勝進出(および得点獲得)の確率が高い両りレー種目(4×100mR, 4×400mR)・800m等についてはトレーニング・コーチング・スカウティングのすべての面から強化することが必須となる。

また選手個々としては、日本インカレ・日本選手権・国体等の全国レベル大会への出場者を増やし、同レベルでのタイトル獲得(=優勝)、さらには2019年ナポリユニバーシアード・2020年東京オリンピック等の国際レベルで活躍することのできる選手を輩出することを明確な目標としたい。

以上の2点を本学陸上部の主要課題(2018-2021年)として提示し、本稿のまとめとする。

引用参考文献等

- びわこ成蹊スポーツ大学 年次課外活動報告.
2004-2017
- 関西学生陸上競技連盟HP 記録室. gold.jaic.org/icaak/ (2018/10/21アクセス)
- 前河洋一, 渋谷俊浩, 鯉川なつえ (2003) ランニング学会シンポジウム: ジュニア期のトレーニングを考える. ランニング学研究, 14 (1): 31-33.
- 日本学生陸上競技連合HP 大会情報. www.juau.jp (2018/10/21アクセス)
- 陸上競技マガジン (2018) 「四年間で最も伸びた大学生を探せ! 2017」. ベースボールマガジン社, 2018年6月号: 101-114.
- 渋谷俊浩 (2006) 競技スポーツにおけるコーチングの現状と課題—全日本大学女子駅伝対校選手権大会出場へ向けての取り組み—. びわこ成蹊スポーツ大学研究紀要, 第3号: 23-26.
- 渋谷俊浩 (2007) 記録の推移からみた大学女子駅伝競技の事例的研究—全日本大学女子駅伝対校選手権大会出場へ向けて—. びわこ成蹊ス

- スポーツ大学研究紀要, 第4号:113-122.
- 渋谷俊浩 (2010) 1. 女子駅伝チームを事例に (BSSCにおけるチャンピオンスポーツの現状と課題—学生スポーツを考える—). びわこ成蹊スポーツ大学研究紀要, 第7号:17-22.
- 渋谷俊浩 (2011a) トップアスリートの育成:特集にあたって. びわこ成蹊スポーツ大学研究紀要, 第8号:37-38. 155-156.
- 渋谷俊浩 (2011b) スポーツ学再考:BSSCにおける競技スポーツの現状と課題. びわこ成蹊スポーツ大学「THINK SPORT Vol.2」
- 山本教人 (2005) 駅伝を語る 第51回九州一周駅伝の物語. 体育学研究, 50 (6):641-650.
- 安田淳平 (2017) 陸上競技における関西主要大の競技力の推移. びわこ成蹊スポーツ大学卒業研究抄録集, 2017:235.